令和５年度　旭川市青少年平和大使派遣事業「へいわハンドブック」

令和５年度旭川市青少年平和大使　作成
旭川市市民生活部地域活動推進課　発行

平和都市宣言

（昭和５８年５月３日宣言）

平和を希求することは，人類共通の願いであり，常に求め続けていかなければならない。

人間が傷つけ合い，生命を奪う暴力や争いが絶えることなく続いている。

わが国の非核三原則の堅持はもとより，核兵器の廃絶と戦争の根絶を強く願うとともに，平和な市民生活を脅やかす一切の暴力を排除することを，今こそ，市民一人一人の誓いとすべきである。

ここに，旭川市は平和を願い，幸せな市民生活を守る決意を表明して平和都市を宣言する。

目次

1. 平和大使紹介・派遣前の抱負　・・・ P２～３
2. 事前学習で調べた被爆建造物　・・・ P４～５
3. 長崎での平和学習　・・・ P６～９
4. 長崎での学び（事後学習）　・・・ P10～13
5. 派遣を終えて　・・・ P14～17
6. 私たちが平和のためにできること・・・ P18
7. 平和大使の日程　・・・ P19
8. 平和大使派遣事業概要　・・・ P20
9. 旭川市の平和事業の紹介　・・・ P21

1. 旭川市青少年平和大使紹介・派遣前の抱負

令和５年度旭川市青少年平和大使に選ばれた２名の生徒に，派遣へ向けての抱負を聞きました。

交流会やピースフォーラムを通して，同年代の仲間と交流を深め，これからの世界平和を担う者として共通の認識を持ちたいです。

また，食料や政治的な仕組みについて，戦時中と現在を比較し，平和について考えるとともに，報道されなかった真実についても知りたいと思います。

旭川市立明星中学校

１年　田中（たなか）　亮多（りょうた）

この派遣を通して，本や写真では学びきれていない戦争・原爆の悲惨さや平和の尊さなどを実際に被爆者の話を聴いたり，被爆建造物を見たりすることで，より深く学んでいきたいです。

また，自分が長崎で学んだこと，感じたことを，戦争を体験したことのないたくさんの人たちに伝え，発信していきたいと思います。

旭川市立緑が丘中学校

3年　古俣（こまた）　櫂（かい）

2. 事前学習で調べた被爆建造物

氏名【 田中 亮多 】

興味があったもの

浦上天主堂

浦上天主堂は、キリスト信徒の礼拝の中心地として建設され、当時は東洋一の壮大さを誇った大聖堂であった。

原爆が落ちた時の浦上地区には1万5千人ほどの信者が住んでおり、そのうちの1万人あまりがなくなったと言われている。また、爆心地から約500mに位置した天主堂周辺では、辺り何もなかったかのような焼け野原となり、少しの壁を残して壊滅、約50トンと推定された鐘楼も、爆風で崩れ落ちた。天主堂内部では、2人の神父と数十人の信者がいたが、即死したと思われる。

その後、当時の姿に似せ、レンガスタイルで再建された。周囲には今でも石像などが配置されており、爆風に耐えたもう一つの鐘楼が時を告げている。

【参考】 長崎市公式観光サイト travel nagasaki(浦上教会)
なかさきの平和

氏名【 古俣 櫂 】

興味があったもの

山里国民学校(防空壕、裏門門柱)

爆心地から北へ約700mに位置する山里国民学校は、鉄筋コンクリート3階建ての「コ」の字形の校舎が全壊し、北側校舎の1階と2階を除き全焼した。

同校には、教職員や動員学徒が避難するための防空壕が多く掘られており、その一部が現在も被爆遺構として保存されている。

同校の児童被害は、校区が爆心地であるだけに大きく、在籍総数1581人(昭和20年6月30日当時)のうち、およそ1300人が自宅で死亡した。また、当日の在校者32人のうち、生存者は、奇跡的に防空壕に飛びこんだ3人と、校舎で日直職員だった1人のわずか4人のみだった。

【参考】

hibakuikou-map.jp
at-nagasaki.jp
nagasaki-city.ed.jp
nagasakipeace.jp

3. 長崎での平和学習

平和大使が長崎で学んだことや感じたことを写真やコメントで紹介します。

被 爆 講 話

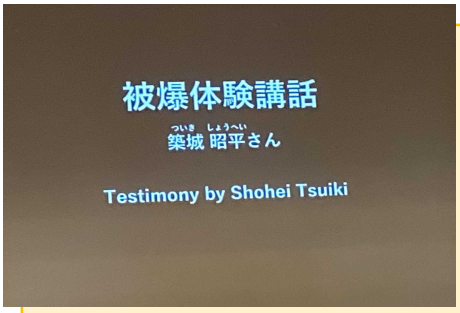
長崎で参加した平和学習「ピースフォーラム」で，被爆講話を聴講しました。

講師紹介

築城　昭平（ついき　しょうへい）さん　被爆当時 18歳・男性

当時長崎師範学校在学中（18 歳）。軍需工場へ学徒動員され，爆心地から 1.8km の学校の寮で，当日の夜勤にそなえ睡眠中に被爆。全身火傷を負う。特に左腕と左足先は重傷だった。

（公益財団法人長崎平和推進協会ホームページより）



フィールドワーク

被爆当時の地層

生活で使われるものが埋まっており，原爆の悲惨さを物語っている。

原爆落下中心地碑

塔の前に置かれた原爆殉難者名奉安箱には，原爆によって亡くなられた方々の氏名を奉安している。

下の川

ここには被爆当時，血や脂，灰などが浮いていたが，水を求めてやってきた人々は不安ながらもその水を飲んだと言われている。

浦上天主堂遺壁

東洋一とも言われた聖堂は，爆風によって無惨にも崩壊した。

平和の泉

「水を，水を」とうめき叫びながら亡くなった被爆者の冥福を祈って建設された。

平和祈念像

上を指した右手は原爆の脅威を，水平に伸ばした左手は平和を，軽く閉ざした目は戦争犠牲者の冥福を祈る，という意味が込められている。

自主学習・折り鶴の奉納

平和公園・平和の鐘

台風の影響により平和祈念式典への参列が叶わなかったので，平和公園に市民のみなさんが心を込めて折った鶴を奉納しました。

浦上天主堂

現在の浦上天主堂は，原爆投下から約14年後の1959年にコンクリートで再建されたのち，1980年に当時の姿に似せて復元された。

4. 長崎での学び（事後学習）

派遣を終えて，印象に残ったことについてまとめました。

氏名【田中亮多】

原爆による甚大な被害について

1945年8月9日午前11時2分、強い発がん性を示す人工元素、プルトニウムを積んだ原子爆弾が長崎に投下された。原爆による被害は大きく3つに分けることができる。

1つ目は、原爆炸裂直後の強烈な熱線である。おおよそ3000℃から4000℃と言われている熱線によって、火災の範囲は爆心地から3.5キロメートルにも及んだ。長崎市の3分の1が全焼した大火災が収まったのは夜中の12時ごろであったという。

2つ目は、爆風である。立っていられない風速が25～30mなのに対し、爆心地付近では風速300mであったと推定されていることをみると、いかに激甚な破壊力であったかが分かる。その後、爆風の力は衰えることなく、15キロメートル先まで破壊の影響が及んでいる。

【参考】

氏名【田中 亮多　　】

3つ目は、放射線である。放射線は人体を刺し貫いたとき、細胞を破壊するが、その損傷は被爆した量によって異なる。爆心地から1キロメートル以内で被爆した人のうち、外傷は無くても大多数の人が死亡した。放射線の恐ろしさは、爆発のときだけではない。何ヶ月、何年と時が経つにつれて深刻な症状を引き起こした。1945年の夏に始まった放射線障害は、今なお消えることがないと考えると、被爆者と共存している我々にとって何かできることを探す価値があるのではないかと思えてくる。そして原爆は、医療救護体制にも壊滅的な打撃を与えた。しかし、燃えさかる炎の中を走った救護隊は多数の負傷者を沿線の病院へ運び、夜になると救援隊が長崎市に入ってくるなど、ひとつの命を救うために決死の活動をした。

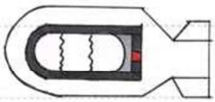
【参考】

氏名【 古俣 櫂 】

日本に落ちた2つの原子爆弾の比較と長崎の原爆被害

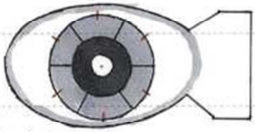
原子爆弾とは、ウランやプルトニウムなどの元素の原子核が起こす核分裂反応を使用した、核爆弾である。長崎に投下された原子爆弾、通称「ファットマン」は、3日前に広島に投下された原子爆弾、通称「リトルボーイ」よりも威力が強いものだった。広島に投下された「リトルボーイ」には、ウランという天然放射性元素が用いられた。天然ウランは、核分裂が起きにくいウラン238が99.3%を占めており、核分裂が起きやすいウラン235は、わずか0.7%しか占めていない。そこで、核分裂反応に貢献する同位体(ウラン235)の濃度を高める作業を行う(「ウラン濃縮」)。長崎に投下された「ファットマン」には、広島と同じウランではなく、プルトニウムという人工放射性元素が用いられた。プルトニウムは、核分裂を起こしやすく、生成も容易で、ウランよりも少ない量で、多くの爆発エネルギーを生むことが出来る。

広島型原爆



長さ3m 直径0.7m 重さ4トン
64kgの高濃縮ウランが含まれている

長崎型原爆



長さ3.25m 直径1.52m 重さ4.5トン
6kgのプルトニウムが含まれている

【参考】

https://nagasakipease.jp
https://www.city.urayasu.lg.jp
wikipedia
neona.nagasaki-u.ac.jp

核分裂反応(核分裂)とは、原子核が分裂して同程度の大きさの原子核に分かれること。

氏名【古俣 櫂　　】

1945年8月9日午前11時2分、長崎に原子爆弾が投下された。浦上地区の上空約500mで爆発した、原子爆弾は爆発と同時に摂氏数千万度ともいわれる火球が発生した。火球から放射された3000度から4000度と推定される熱線により、原爆が投下された近くでは、燃えるもの全てが火を吹き、人々の皮ふは焼けただれ、剥がれ落ちた。また、爆発に伴って生じた爆風によって、ものすごい力が働き、押しつぶされた建物の下敷きになったり、飛んできたガラス片などが突き刺さったりして、多くの人が亡くなった。原爆は他の爆弾とは違い、放射線というものを排出する。放射線は、目で見たり触ったりできないが、放射線を浴びると、からだの様々な細胞を傷つけ、臓器の働きが悪くなって病気になる。原爆による放射線被害は、「原爆症」とも呼ばれており、原爆投下から時間が経った後に、多くの人が亡くなった。

1個の爆弾でも、これほど無惨で大きな被害や命を奪う原子爆弾を地球から廃絶することが、世界の恒久平和の実現に1歩近づけることなのではないかと強く思う。

【参考】

nagasakipease.jp

5. 派遣を終えて

長崎で学んだことや感じたことをまとめました。

「平和の実現に向けて」　　田中　亮多

「のどが乾いてたまりませんでした　水にはあぶらのようなものが一面に浮いていました　どうしても水が欲しくて　とうとうあぶらの浮いたまま飲みました」

これは，長崎の平和公園にある石碑に刻まれた，水を求めてさまよった少女の手記です。

長崎を訪れ，初めてこの手記を知ったとき，大きな衝撃を受けるとともに，「このような状況に陥ったとき，自分には何ができただろう。」と考えました。

長崎では，平和公園，原爆資料館など，さまざまな施設を訪れることができました。また，被爆の講話を聞くなど，見聞を広げる中で，今を生きられるのは，戦禍を生き抜いた祖先が，命のバトンを繋いでくれたからだと強く感じました。今，私が生きていく理由が分かった気がするのです。

8月9日，今年も長崎原爆犠牲者慰霊平和祈念式典が開催されました。平和宣言で，長崎市の鈴木市長は，「核抑止への依存からの脱却を勇気を持って決断すべきだ」と述べました。核兵器を所有する国があっては，いつ使われてもおかしくないのです。

2017年7月，国連で採択され，それから約3年半が経った2021年1月22日に発効した「核兵器禁止条約」に，日本は今なお署名・批准していません。日本はアメリカの核の傘の下にあるという状況ではありますが，核廃絶を目指すべき道もあるはずです。

たった一発の原子爆弾によって，それからの社会を担うはずであった 38,000 人の子どもの命が失われました。原爆が社会に与える影響を改めて理解すると同時に，一人一人の命の重みを感じる必要があります。

私は，長崎での学びを通して，様々な世代が，原爆の悲惨さについて学ぶことが，尊い平和の実現に向けて一歩前進できるものと確信しました。そのため，私は長崎で得た経験や思いを，身近な人達から，更には市民をはじめ多くの人に発信していきたいと思います。

「長崎の派遣を通して」　　古俣　櫂

今まで，学校などで戦争について学んではいましたが，今回，長崎を訪れ，自らの目で見た，耳で聞いた長崎の被爆の実状は，想像を絶するものでした。

鉄をも溶かす 3,000 度から 4,000 度の熱線で灼かれた建物や人。一瞬にして失われた命。命は助かっても，目玉が飛びでていたり，皮膚がただれた無惨な姿。あの日，長崎では，死者約 74,000 人，負傷者約 75,000 人の被害が出たそうです。

特に，原爆資料館で見た写真の中で，印象深かったのが，食べる物もない母親が，乳をあげ，栄養のない乳で，さらに弱る乳飲み子。子の亡骸をかかえ歩く母。自らの手で，身内を焼かなければならない現実。どれも今では考えられず，戦争がもたらした，多くの悲しみを強く感じました。そして，「唯一の被爆国，日本」に暮らす私ですが，平和であることが当然のように生きています。しかし，終戦から78年という月日が経ち，生きている被爆者の人が年々少なくなる一方で，戦争を知らない世代が増える中，私たち若い世代は，この恐ろしい悲劇を繰り返さないためにも，過去の悲しみや苦しみを忘れることなく，被爆者の平和への思いを多くの人に知ってもらい，次世代に語り継いでいくことが重要です。

今，私たちは，衣食住に困ることなく，何不自由なく暮らせていますが，一部の国では，戦争をしていたり，人が人を殺す道具をどんどん生みだしていて，核もその一つです。地球全体の核の保有数は年々少なくなってはいますが，核が完全に廃絶となるには，まだ，程遠い数です。「核抑止」という言葉はおどしでしかなく，核保有国同士の関係が悪くなり，核の打ち合いなどになれば，地球は死の惑星と化します。真の意味での世界の恒久平和を願うのなら，この地球から核というものを完全に廃絶し，人が人を殺すのではなく，人が人を救う世の中を目指していくべきだと強く思いました。

6. 平和のために私たちができること

これから私たちは，平和な未来へ向けて何ができるのか，平和大使として長崎に派遣される前と後ではどんな気持ちの変化があったのか比べてみました

派遣前

・戦争経験者の経験談を語り継ぐ。

・原爆の悲惨さを伝える。

・国際理解（国際的な対話，コミュニケーションを増やす。）

・国内の同年代の意見交換。

・自分の周りから平和学習を進める。

・平和活動に参加する。

・戦争を知らない若い世代にもっと戦争について知ってもらう。

・道徳の授業の時間などを活用して戦争についてもっと知ってもらう。

・平和活動をもっと増やす。

派遣後

・被爆者から聞いた話・思いを受け継ぎ，若い世代へと語り継ぐ。

・戦争を経験した自分たちの祖先のことについて調べてみる。

・総合の授業の時間でグループディスカッションをするなどして，「平和」に対して興味や関心がない人に興味を持ってもらう。

・交流会やボランティア活動など，平和に向けた事業を興す。

・小学生や未就学児などを対象とした，原爆や平和についての絵本の読み聞かせなどを行う。

派遣前よりも，平和に対する想いがより強く，より具体的になりました。

7. 平和大使の派遣日程(令和 5 年度)

8月7日(月)	旭川→長崎　移動日
8月8日(火)	原爆資料館･永井隆記念館見学 千羽鶴奉納 ピースフォーラム参加(被爆体験講話･フィールドワーク) 交流会
8月9日(水)	台風の影響により，ホテルにて自主学習
8月 10 日(木) ～11 日(金)	自主学習(浦上天主堂等の見学)
8月 12 日(土)	旭川→長崎　移動日

台風6号の影響で復路の飛行機が欠航となり，予定より 2 日滞在が延びました。しかし，時間を有効活用してより平和への学びを深めることができました！

8. 旭川市平和大使派遣事業について

目 的

戦争経験のない子どもたちを「平和大使」として被爆地に派遣し，全国から集まった同世代の仲間とともに平和学習に参加することにより，被爆の実相や平和の尊さを学び，派遣終了後はその学習成果や平和の大切さを広く市民に発信することを目的としています。

派 遣 対 象・人 数

市内中学生　若干名
※作文による募集･選考により決定

平 和 大 使 のスケジュール

7 月下旬	説明会及び第 1 回事前学習会
8 月上旬	出発挨拶，第 2 回事前学習会
8 月 7 日～10 日	長崎市へ派遣
8 月中旬	第 1 回事後学習会（報告パネル展準備）
8 月下旬	派遣報告会
9 月上旬	第 2 回事後学習会（へいわハンドブック作成）
9 月中	派遣報告パネル展開催

あなたも平和大使として被爆地長崎で平和について学び
平和の大切さを伝えてみませんか？

9. 旭川市の平和の取組

平和都市宣言絵画・ポスターコンクール

市内小中学生を対象に平和をテーマとした図画を募集

募集予定時期:4 月～6 月下旬

旭川市青少年平和大使派遣事業

被爆地に青少年を派遣し，被爆の実相や平和の尊さについて学んでもらい，市民に平和の大切さを伝えてもらう

募集予定時期:4 月～5 月下旬

平和の折り鶴事業

市民の方から千羽鶴を募集し，長崎原爆資料館及び長崎原爆犠牲者慰霊平和祈念式典会場へ奉納

募集予定時期:4 月～7 月上旬

平和月間・ピースウィーク

8 月の 1 ヶ月間，旭川市中央図書館にてコンクール入賞作品をはじめとした平和関連ポスターを展示

実施予定時期:8 月

ミニミニ原爆展・移動原爆展

ミニミニ原爆展

市内公共施設で，ヒロシマ・ナガサキ原爆写真ポスター展を開催

移動原爆展

市内小中学校に原爆写真ポスター及び平和と学びポスターを貸出

令和５年度旭川市青少年平和大使派遣事業
へいわハンドブック
発行日　令和５年９月８日
発行者　旭川市市民生活部地域活動推進課

〒070-8525　旭川市６条通９丁目
TEL:0166-25-6012
FAX:0166-25-6515